

志波彦神社・鹽竈神社における氏子祭の変容と課題

山口 沙織, 植村 円香

Changes in the Local Festival and Associated Issues of Shiwahiko Shrine and Shiogama Shrine

YAMAGUCHI, Saori ; UEMURA, Madoka

Abstract

This study aims to clarify how the local festivals of Shiwahiko Shrine and Shiogama Shrine, located in Shiogama city, Miyagi prefecture, have evolved while maintaining continuity, and to identify challenges for the festivals. Through an analysis of historical records and interviews with stakeholders associated with the shrines, our results revealed that changes in the festival dates, along with the reorganization and expansion of the organizing committees from the 1950s to the 1970s, played a crucial role in securing a wider range of participants from both within and outside the city. Consequently, the 1980s to 1990s saw the realization of a greater depth of events and an expansion in scale. Moreover, in the 2000s, the recognition of the festivals by the Japan Center for Regional Development and similar entities led to the awarding of honors, fostering a sense of pride among festival participants in Shiogama city. These factors collectively contributed to the continued existence of the local festivals. While events expanded and the number of collaborators increased, challenges have arisen due to the aging of participants involved in the sacred rituals, particularly those responsible for carrying the portable shrines and participating in the processions.

キーワード: 氏子祭, 神社, 高齢化, 塩竈市, 宮城県

Key Words: Local Festival, Shrine, Aging, Shiogama City, Miyagi Prefecture

I. はじめに

日本各地では、高齢化により祭礼の存続が困難になっている。しかし、近年は担い手や内容の変化により、祭礼が存続している事例が報告されている。

担い手の変化に注目した既存研究では、大島 (2022) が、地域外から神輿の担ぎ手である輿丁を受け入れることで、祭礼の存続が可能になったことを報告した。こうした地域外参加者は、祭礼の存続を可能にする一方、楽しみと自己充実を目的とし、地域に愛着を持つ人々との意識を強化する共同性の統合が不在であるという批判がある (松平, 1989)。この点について、三隅 (2020) は、祭礼を運営する町内に協力的な地域外参加者も存在し、自己充実を優先する者だけではないことを明らかにした。また、坂本ほか (2018) は、近年の祭礼が、地域内外の住民にとって新たなつながりを形成する場として機能していることを指摘した。

内容の変化に注目した既存研究では、山田ほか (2020) が、輿丁の減少により、トラックに神輿を乗せて巡幸するなど祭礼の簡略化がみられることを報告した。また、卯田・阿部 (2015) は、従来の祭礼にイベントを加え

て町民祭りに変更したことで、多くの担い手がかわるようになったことを指摘した。

以上のように、日本各地の祭礼のなかには、多様な変容を経て存続している事例がみられる。本研究の事例として取り上げる宮城県塩竈市の志波彦神社・鹽竈神社の氏子祭は、年3回実施され、それぞれ80人～200人程度の輿丁が集まる。また、氏子祭のひとつであるみなと祭は、市内だけでなく県外や海外からの観光客が訪れ、宮城県においても主要な祭りとして発展している。

本氏子祭に関する既存研究は、氏子祭の歴史的な形成過程に注目した境 (1977) や押木 (2019) のほか、神輿渡御の変化に注目した菅野 (2008) などが存在する。しかし、本氏子祭がどのように変容しながら存続してきたのか、またどのような課題に直面しているのかという点に注目した既存研究は管見する限りみられない。そこで本研究では、志波彦神社・鹽竈神社における氏子祭の変容過程と継続要因を明らかにするとともに、今後も氏子祭を継続するうえでの課題を指摘することを目的とする。

II. 塩竈市と志波彦神社・鹽竈神社の概要

1. 塩竈市の概要

塩竈市は、仙台市から北東約 16 km に位置し、多賀城市、利府町、七ヶ浜町と接している（図 1）。また、同市は、松島湾と接する中心部である平野、それを囲む丘陵地帯、松島湾に浮かぶ 4 つの有人島と 200 以上の無人島からなる。松島湾内にある塩釜湾には、宮城県の主要 4 漁港のひとつである塩釜港があり、同湾周辺には蒲鉾などを作る水産加工業者が集積している。

塩竈市の面積は、約 17.37 km² で、2020 年の人口 52,203、65 歳以上の高齢化率 33.9% である（2020 年国勢調査による）。同市の中心部にある JR 仙石線本塩釜駅（以下、本塩釜駅とする）の西側は、鹽竈海道に沿って中心商業地が形成され、酒蔵などの歴史的町並みが続く。本塩釜駅から鹽竈海道を西に徒歩 10 分ほどの場所に志波彦神社・鹽竈神社の表参道の鳥居がある（図 1）。

2. 志波彦神社・鹽竈神社の概要

志波彦神社と鹽竈神社の二社は、同一境内に鎮座している。塩竈市教育委員会（2022）および志波彦神社・鹽竈神社境内資料によれば、鹽竈神社と志波彦神社の概要は以下の通りである。

鹽竈神社は、別宮に鹽土老翁神、左宮に武甕槌神、右宮に経津主神を祀っている。鹽竈神社の創建の年代は不明であるが、平安時代に編纂された「弘仁式」と「延喜式」に「鹽竈神を祭る料壺萬束」と記されていることから、当時すでに重要な神社であったといえる。



図 1 塩竈市と志波彦神社・鹽竈神社の位置

注：神社の位置に関しては、志波彦神社・鹽竈神社のホームページを参考にした。（筆者作成）

江戸時代には、朝廷から正一位という最高の位を授かったほか、仙台藩の伊達家が厚い崇敬を寄せた。2023 年現在の社殿は、仙台藩 4 代目藩主・伊達綱村が 1695 年に塩竈の町づくりと共に神社造営の工事に着手し、1704 年の 5 代藩主・伊達吉村の時に完成したものである。また、明治時代には、国幣中社に列格した。

志波彦神社は、国土開発・産業振興・農耕守護の神である志波彦神を祀っている。同神社は、仙台市岩切村（現・仙台市岩切）の冠川の畔に鎮座し、前述の「延喜式」にもみられる格式高い神社である。1871 年に国幣中社に列格したが、境内が狭く祭典を行うことが困難であったことから、鹽竈神社境内に新たに社殿を国費により造営することになった。造営にあたり、まず 1874 年に鹽竈神社の別宮本殿に遷祀し、1934 年に現社地に社殿を起工し、1938 年に完成し遷座した。

また、志波彦神社・鹽竈神社の境内には、1965 年開設の鹽竈神社博物館がある。本博物館には、仙台藩の歴代藩主が奉納した刀剣や古文書・絵画のほか氏子祭の際に使用する鹽竈神社と志波彦神社の重さ 1t の神輿が展示されている。

III. 氏子祭の変容と継続要因

氏子祭は、3 月の帆手まつり、4 月の花まつり、7 月のみなと祭と年 3 回実施される。本章では、2023 年調査時点での氏子祭の概要を説明したうえで、氏子祭の変容過程と継続要因を分析する。

1. 氏子祭の概要

氏子祭では、神輿を担いで市内を巡幸する神輿渡御という神事を行う点で共通している。その行程は、以下の通りである。まず、氏子祭前夜に神を神輿に遷す御奉遷祭を行い、その神輿を神輿世話役が一晩中警護する。氏子祭当日の朝には、本殿での神事である本殿祭ののち、発輿祭で祝詞が読み上げられる。次に、神輿は、16 人の輿丁に担がれ、202 段の表参道を下る（写真 1）。1 基あたり 80 人ほどの輿丁と交代しながら、町内ごとに設置された御旅所を巡幸する（写真 2）。御旅所とは、神輿巡幸の際に神が休憩する場所である。町内を巡幸した神輿は、18 時～19 時頃に表参道を上り、奉安場所である鹽竈神社博物館に戻る。その後、神を社殿に遷す神事を行う。

これらの神輿渡御神事にかかわる主要な運営組織は、祭典委員会と供奉委員会がある。前者は、神輿渡御の順路や道路規制の確認、予算の決定など神輿渡御を円滑に行うための会である。後者は、神輿渡御の行列に参加する供奉が集まる会である。2023 年調査時点では、供奉委員会は、先陣組、少年武者組、神子組、神輿世話役（本

陣組), 後陣組, 神馬組²⁾, 御供役会, 氏子青年会(興丁組), 志波彦神社神輿世話役で構成されている。それぞれの供奉は, 主に神社周辺の町内で組織されており, 御旅所も主に町内ごとに準備する。

氏子祭では, 上記のように共通して実施される神輿渡御のほか, 各祭りにも特徴がある。帆手まつりは, 1682年から続く景気回復と火災鎮圧を目的とした祭りであり, 3月10日に開催される。同祭りは, 鹽竈神社の神輿のみ主に神社西部を巡幸し, イベントは実施されない。

花まつりは, 1778年から続く豊作を目的とした祭りであり, 4月第4日曜日に開催される。同祭りは, 鹽竈神社の神輿のみ神社北部を巡幸する。また, 塩釜商工会議所青年部が主催する「市民まつり」と同時開催され, 本塩釜駅周辺では飲食物販の出店やイベントなどが行われる地域祭りとなっている。2023年の花まつりは, 約22,000人の入込客数であった(塩釜商工会議所, 2023a)。

みなと祭は, 1948年に戦後復興と海上安全を目的と



写真1 鹽竈神社の神輿が表参道を下る様子
(2015年4月筆者撮影)



写真2 御旅所の様子
(2023年7月筆者撮影)



写真3 みなと祭の海上渡御の様子
(2015年7月筆者撮影)

して始められた祭りであり, 7月第3日曜日に実施される。鹽竈神社と志波彦神社の両神輿が神社東部を巡幸するほか, 松島湾内を巡幸する海上渡御も行われる(写真3)。また, みなと祭当日に, 江戸時代に流行したよしこの節を継承した「よしこの塩竈」という曲に合わせて約3,000人が踊る陸上パレードが行われるほか, 前夜祭には花火大会も行われる。2023年のみなと祭当日は, 約36,000人, 前夜祭の花火大会は約119,700人の入込客数であり(塩釜商工会議所, 2023b), 宮城県の主要な祭りとなっている³⁾。

2. 氏子祭の変容

氏子祭は, 前節で述べたように開始年や目的が異なるだけでなく, 帆手まつりは神輿渡御の神事のみ, 花まつりは地域祭り, みなと祭は宮城県の主要な祭りとして発展するなどの特徴がみられた。そこで, 氏子祭が始まって以来, どのように変容しながら現在に至るのかを, 第二次世界大戦前, 第二次世界大戦後～1970年代, 1980年代～1990年代, 2000年代以降に4区分して説明する。なお, 氏子祭に共通する変化も説明する必要があることから, 氏子祭ごとではなく上記の時代区分で整理している。また, 本節は, 2023年2月に実施した鹽竈神社神輿世話役等への聞き取り調査及び関連書籍・資料を整理した内容である。

(1) 第二次世界大戦以前の氏子祭

塩竈は, 港で水揚げされた海産物を仙台北町に輸送することで栄えた。しかし, 1670年に塩竈湾口の牛生から大代を経て七北田川河口の蒲生に至る全長約7kmの舟入堀の工事が開始され, 1673年に竣工すると塩竈の港が急激に衰退した(塩竈市教育委員会, 2022)。また, 延宝年間(1673年～1681年)から火災が毎年のように

発生し、1682年に大火事にみまわれた（押木，2019）。

そこで火災鎮圧のために、1682年1月20日に若者（倅）が「竜のひげ」という草で梵天をつくり、竹の脇差しをさし、紙の法被を着て、町内を練り歩いたのが氏子祭の始まりとされる（押木，2019）。当時は、若者が始めた祭りであることから、倅まつりと呼ばれた。

1684年に、代官により倅まつりが贅沢とされたことから祭りを中断すると、この年に大火に見舞われた（押木，2019）。そこで、倅まつりは、1685年に再開し、1686年から1月28日に実施されることが決められた。

1731年に鹽竈神社の神輿が作成され、1733年に同神社内に奉納された。奉納以降は、同神社の東側に位置する宮町の住民が管理し、神輿渡御が開催された。神輿渡御に加わる供奉は、この頃に形成され、神輿の前を歩く先陣組、神輿を担ぐ本陣組、神輿の後を歩く後陣組で構成されており、それぞれ南町、宮町、赤坂の各町が担った（茂木，2023）。

その後、明和頃（1764年～1772年）まで早魃による不作が続いたことから、1776年と1777年に1月28日と3月10日の2回にわたり祭りを執行すると作柄が回復した（茂木，2023）。そこで、1778年から1月28日は神輿渡御のみ、3月10日に華やかな祭りが行われ、氏子祭は年2回実施されるようになった。

境（1977）によれば、1867年に大火に見舞われると、1月の神輿渡御は、後陣組が供奉を出すことが困難になり、長らく先陣組と本陣組だけで実施していた。その後、1914年に赤坂旧道、新道、石堂、玉川、母子沢、大日向の6町による後陣組が復活した。また、新興地である北浜が供奉への参加を先陣組に相談したことで、1916年に巫女組（現・神子組）を、1918年に稚児組（現・少年武者組）を出し、子どもが渡御行列に参加するようになった。このように、供奉団体が増加するなかで、1912年に祭典委員会という氏子祭全体を統括する組織が形成された（境，1977）。

その後、1910年に鹽竈神社の祭日を旧暦から新暦に改める際に、1月28日の氏子祭は3月10日に、3月10日の氏子祭は4月25日に改められ、前者は帆手まつり、後者は花まつりと称されるようになった（境，1977）。

（2）第二次世界大戦後～1970年代の氏子祭

第二次世界大戦後の1948年に、みなと祭が開始された。これは、戦後復興と海上安全祈願のため塩釜商工会議所が祭典委員会に海上渡御を申し出たことが始まりとされる。同年には、水産関係業者を中心に塩竈みなと祭協賛会が結成され、みなと祭の運営に携わるようになった。

みなと祭開始当時は、鹽竈神社の例祭日である7月

10日に実施され、同神社の神輿のみ市内巡幸と松島湾内の海上渡御を中心とする祭りであった。しかし、みなと祭開催日は、梅雨の時期であるため雨が多かったことから、快晴のもと仙台七夕まつりの開催にあわせて観光客を呼び込むために、祭典委員会により1963年から8月5日に変更された（塩竈みなと祭協賛会，2018）。

また、1964年には志波彦神社の神輿が、塩竈市の水産関係者により魚市場の移転を記念して作成された。そのため、1964年以降のみなと祭では、鹽竈神社と志波彦神社の両神輿による市内巡幸と海上渡御が行われている⁴⁾。このように、みなと祭は水産業者を主体とする祭りであったが、1976年から「市民総参加のまつり」を合言葉に、商工業青年部連合会（現・塩釜商工会議所青年部）11団体が、飲食物販店の出店や舞台演出を行うなど、地域祭りに移行した（塩釜商工会議所青年部，1985）。

氏子祭全体に関連する変化としては、輿丁の募集方法が変更されたことである。輿丁は、奉賛会という組織が募り、神輿世話役である宮町が神輿の担ぎ手を決定していた。また、輿丁は、宮町居住者やその親戚などが担うことが多かったが、高度経済成長期に若者が市外流出したことで、減少していた。そこで、輿丁を確保するために、1956年に氏子青年会⁵⁾が結成された。これは、本陣組から独立した神輿を担ぐ団体であり、神輿を担ぐときのみ輿丁組と呼ばれる。氏子青年会が結成されてからは、同会が定員を設けずに宮町関係者以外からも広く輿丁を募るようになったことで、輿丁希望者が増加したという（神輿世話役への聞き取りによる）。

（3）1980年代～1990年代の氏子祭

1980年代～1990年代の氏子祭は、神輿還御の順路変更、花まつりの地域祭りとしての発展、みなと祭の規模拡大がみられた。

まず、神輿還御の順路変更について、1989年までは七曲坂を使用していたが、1990年からは表参道が使用されるようになった（図1）。その理由は、七曲坂が未整備であったことから還御の際に危険であること（神輿世話役への聞き取りによる）、202段の表参道を還御する様子を観客から注目される見せ場にしたいという祭典委員会の希望があったこと（塩竈みなと祭協賛会，2018）が挙げられる。

次に、花まつりは、1985年から塩釜商工会議所青年部主催の「市民まつり」と同時開催され、神輿渡御のほかに本塩釜駅前飲食物販の出店やイベントの開催がなされている。このように、花まつりは、市民まつりと同時開催されることで、地域祭りとして規模拡大した。また、地域祭りとして多くの参加団体を確保するため、花

まつりは同年より4月25日から4月第4日曜日に変更された。

最後に、みなと祭の規模拡大の過程について説明する。みなと祭は、1981年にイベントとして舞台演出がなされるようになった。また、翌年には、8月4日に前夜祭での花火大会、8月5日に本祭での海上渡御を含む神輿渡御とパレードが行われ、2023年調査時点での体制が確立された。パレード曲は、「ハットセ塩釜甚句」という遊郭をもとにした歌詞であったことから、みなと祭協賛会を中心に曲の変更が検討され、1989年に軽快なよしこの節というリズムである「よしこの塩竈踊り」に変更された（塩竈みなと祭協賛会、1998）。

このように、みなと祭は、主催者や協力団体の工夫により、イベントやパレードの変更・拡充がなされたことで、多くの観光客をひきつけることになった。その結果、1980年代初頭には入込客数が30,000人程度であったが、1990年代後半には200,000人程度まで増加した（宮城県観光統計による）。以上のように、1970年代には地域祭りであったみなと祭は、塩竈市外からも見学者が増えたことで、宮城県の主要な祭りとして発展した。

(4) 2000年代以降の氏子祭

2005年にみなと祭の開催日が、8月5日から7月第3日曜日の海の日に変更された。これは、神輿渡御の関連団体だけでなく、花火大会、陸上パレード、飲食物販の出店などに多くの関係者がかかわるようになり、氏子祭の継続的な実施のために開催日を休日にする必要が生じたからである。

こうして発展したみなと祭は、2006年に水産庁から「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に認定された。また、2011年の東日本大震災後も海上渡御を継続し被災地復興の象徴になったこと、地域内の多様な団体がかわり交流することで発展性が期待されたことから、2014年に一般財団法人地域活性化センターの「第19回ふるさとイベント大賞」にて内閣総理大臣賞を受賞した。

2020年～2022年のCOVID-19による感染拡大時は、神輿の市内巡幸・海上渡御が中止され、境内渡御に変更された。しかし、2023年には、神輿の市内巡幸・海上渡御のほかイベントなど氏子祭の全行程が復活した。

(5) 小括

本節では、氏子祭が始まって以来、どのように変容してきたかを4つの時代区分に分けて説明してきた。その結果、第二次世界大戦後、担い手が減少するなかで、氏子祭が継続してきた要因として、「開催日の変更」のほか、「運営組織の再編・広域化」、「イベント等の充実・規模

拡大」、「認定・賞の授与」、「担い手の氏子祭に対する誇りの醸成」が以下のように段階的にみられた。

第二次世界大戦後～1970年代に、輿丁の減少のなかで、氏子青年会を結成し、輿丁を広く募集することで担い手を確保する「運営組織の再編・広域化」がみられた。また、みなと祭においては、神輿渡御に関わる町内だけでなく、水産業者や塩釜商工会議所青年部などの地域内の各種団体が関わることで、地域祭りとして発展した。

このように、氏子祭の担い手を広く確保したことで、1980年代～1990年代に「イベント等の拡充・規模拡大」が可能になった。具体的には、花まつりは、塩釜商工会議所青年部主催の「市民まつり」と同時開催することで、地域祭りとして発展した。一方、みなと祭は、多様な担い手の工夫により、イベント等の拡充・規模拡大がなされたことで、地域祭りから宮城県の主要な祭りへと発展した。

2000年代以降には、みなと祭において水産庁や一般財団法人地域活性化センターから「認定・賞の授与」がなされ、全国的に認められると、「担い手の氏子祭に対する誇りの醸成」がなされ、氏子祭が継続されたといえよう。また、氏子祭開催日は、約20年ごとに変更することで、担い手の確保と観光客の増加を実現していた。このことから、「開催日の変更」も氏子祭の継続要因と考えられる。

IV. 氏子祭の課題

第二次世界大戦以降、志波彦神社・鹽竈神社の氏子祭は、大きく変容・発展しながら継続してきたが、神輿世話役・神職への聞き取り調査と統計資料から神輿渡御において2つの課題が生じていることが明らかになった。

第一の課題は、氏子青年会会員と役員の高齢化である。1960年代～1970年代に、輿丁は基本的に氏子青年会に所属する塩竈市出身の20歳代が中心であったが、2023年調査時点では、40歳代が中心であった（2023年2月の神輿世話役への聞き取りによる）。同会員のうち担ぎ手として積極的に携わる者が役員となるが、この役員（2023年調査時点で40名程度）が氏子祭のたびに知り合いに声をかけて輿丁を募集している。近年は、役員の高齢化により、知り合いの年齢層も高くなることから、輿丁の高齢化がみられるという（2023年2月の神輿世話役への聞き取りによる）。輿丁のなかには、宮城県仙台市の青葉神社や山形県山形市の六榎八幡宮の氏子による応援参加や塩竈市内の水産加工工場に勤務する外国人技能実習生の参加もみられる（2023年2月の神職への聞き取りによる）が、神輿渡御の継続のためには、輿丁の募集や統括に携わる役員の育成が必要だろう。

第二の課題は、供奉団体と御旅所を担う町内の高齢化

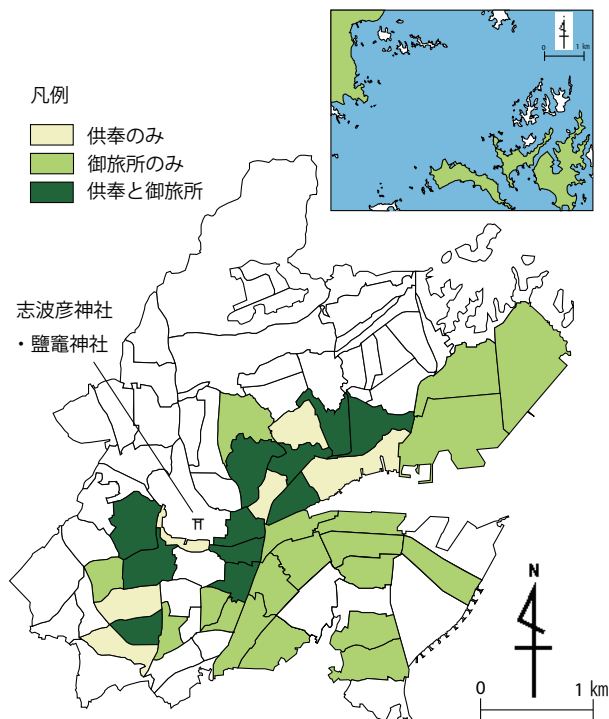


図2 供奉・御旅所を担う町内
(2023年2月神輿世話役への聞き取りによる)

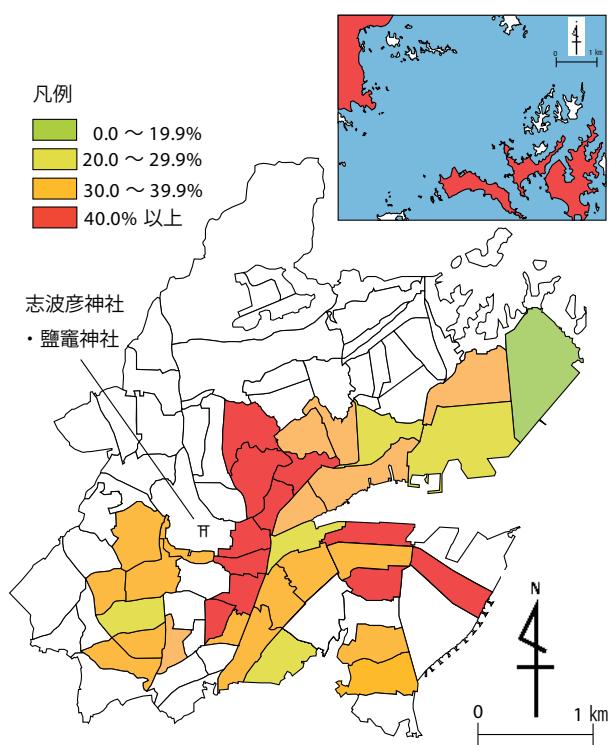


図3 供奉・御旅所を担う町内の高齢化率
(塩竈市市民生活部市民課資料による)

である。図2は、供奉と御旅所を担う地域を示したものである。この図から、供奉は、神社周辺の地域で担われており、御旅所は、神社周辺の地域に加えて塩竈市東部

と離島の地域で担われていることがわかる。この供奉と御旅所を担う地域の高齢化率(2021年)を図3で示すと、供奉か御旅所のいずれかを担う地域は、高齢化率が20.0%～39.9%であるが、供奉と御旅所の双方を担う地域の大半は、高齢化率が40.0%を超える。これらの町内の多くは、神輿渡御の統括や運営に携わる祭典委員会も兼任している。そのため、供奉、御旅所、祭典委員会を今後も町内単位で担う場合、氏子祭のうち神輿渡御の継続が困難になる可能性がある。

V. おわりに

宮城県塩竈市に位置する志波彦神社・鹽竈神社の氏子祭は、神輿渡御の継続だけでなく、地域祭りや宮城県の主要な祭りとして継続し発展してきた。そこで本研究では、志波彦神社・鹽竈神社の氏子祭がどのように変容しながら継続してきたのかを明らかにするとともに、今後も氏子祭を継続するうえでの課題を指摘することを目的とした。

志波彦神社・鹽竈神社関係者への聞き取り調査と同神社関係資料・統計分析により、氏子祭の時系列的变化を分析した。その結果、III章2節5項の「小括」で指摘したように、第二次世界大戦以降の氏子祭は、その担い手が減少するなかで、まず「運営組織の再編・広域化」により、広く担い手を確保した。これにより、1980年代～1990年代には、花まつりが地域祭り、みなと祭が宮城県の主要な祭りとして発展するなど「イベント等の充実・規模拡大」がみられた。また、2000年代以降は、みなと祭が水産庁や一般財団法人地域活性化センターからの「認定・賞の授与」により、「担い手の氏子祭に対する誇りの醸成」がなされた。また、多くの担い手の確保や見学者の増加のため、約20年ごとに「開催日の変更」がなされたことも継続要因となっていた。

このように、志波彦神社・鹽竈神社の氏子祭は、神事としての神輿渡御だけでなく、多様な団体の協力のもとイベント等を規模拡大することで発展してきた。しかし、氏子祭のうち神輿渡御に関しては、IV章で指摘したように2つの課題がみられた。第一の課題は、氏子青年会会員と役員の高齢化である。そのため、他の神社の氏子や外国人技能実習生など一時的な参加者もみられた。こうした一時的な参加者は、担ぎ手を確保する点が必要であるが、今後は、輿丁の募集や統括を担う役員の育成が求められる。第二の課題は、供奉と御旅所を担う町内の高齢化である。これらの町内の多くは、神輿渡御の統括や運営に携わる祭典委員会を兼任している。そのため、今後も供奉、御旅所、祭典委員会を町内単位で担う場合、氏子祭のうち神輿渡御の存続が困難になる可能性がある。

以上のように、氏子祭の神輿渡御では、担い手の高齢化が課題であった。今後は、輿丁や供奉等の参加者を外部化することでその数を確保しつつ、神輿渡御の統括や運営に携わる主要な担い手の育成も必要だろう。

謝辞

現地調査では、鹽竈神社神輿世話役の阿部博之様には、神輿渡御について詳しくご解説いただき、同神社学芸員の茂木裕樹様には、氏子祭の歴史に関する貴重な資料をご提供いただきました。そのほか、志波彦神社・鹽竈神社祭典委員会、同神社神職、NPO みなとしほがまボランティアガイドなどご協力いただいたすべての方に、この場を借りて御礼申し上げます。

本研究は、2016年1月に秋田大学教育文化学部に提出した卒業論文をもとに2023年に再調査を実施しまとめたものである。本研究の骨子は、2023年9月の日本地理学会秋季学術大会で発表した。

注

- 1) 鹽土老翁神は、海上安全や漁業の神、塩づくりの神、出産と潮の満ち引きとの関係から安産の神として信仰されている。また、武甕槌神と経津主神は武神であることから、武徳の神として知られている。
- 2) 2007年に御神馬が退落したあとも、神馬組の供奉は継続している。
- 3) 2023年調査時点では、同年度の宮城県観光統計が公開されていない。そこで、COVID-19感染拡大前(2018年)の宮城県「観光統計概要」を参考にすると、「主要な行事・イベント等の観光客入込数」は、10位であった。
- 4) 志波彦神社の神輿は、1964年以降水産関係者が管理してきたが、人手不足のために1966年から赤坂等の町内が管理し、輿丁は氏子青年会が担うことになった(塩釜商工会議所青年部, 1985; 茂木, 2023)。
- 5) 氏子青年会とは、1956年に形成された「神社を中心に集まった青年の組織であり、氏神様や崇敬神社の発展に寄与しながら、地域の発展を進めることを目的」とした団体である(全国氏子青年協議会ホームページによる)。こうした氏子青年会の全国的な組織化のなかで、志波彦神社・鹽竈神社においても同会が組織化された(2023年2月の祭典委員会への聞き取りによる)。

参考文献

- 卯田卓矢・阿部依子(2015): 過疎地域における祭礼の存続形態—佐久市望月地域の榊祭りを事例として—。地域研究年報(37): 33-59.
- 大島 明(2022): 神輿渡御祭における担い手の居住地の変遷—京都市西院の春日祭を事例として—。人文地理74(4): 389-407.
- 押木耿介(2019): 『鹽竈神社』学生社.
- 境 栄一(1977): 『鹽竈神社花祭神幸二百年記念 鹽竈神社御祭禮小誌 付 志波彦神社の御祭禮』志波彦神社・鹽竈神社.
- 坂本優紀・石坂 愛・武智玖海人・周 安琪・岩井優祈・篠原弘樹・白 奕佳・松井圭介(2018): 地方都市における祭礼の変容—土浦八坂神社祇園祭における氏子の対応に着目して—。地域研究年報(40): 51-74.
- 塩竈市教育委員会(2022): 『塩竈の歴史』塩竈市教育委員会.
- 塩釜商工会議所(2023a): しおがま会議所ニュース(5月15日). 塩釜商工会議所(1738): 1-6.
- 塩釜商工会議所(2023b): しおがま会議所ニュース(8月1日). 塩釜商工会議所(1743): 1-6.
- 塩釜商工会議所青年部(1985): 『まつり鹽竈』塩釜商工会議所青年部.
- 塩竈みなと祭協賛会(1998): 『みなと祭五十年史』塩竈みなと祭協賛会.
- 塩竈みなと祭協賛会(2018): 『塩竈みなと祭70周年記念誌』塩竈みなと祭協賛会.
- 志波彦神社・鹽竈神社: 交通アクセス. <http://www.shiogamajinja.jp/about/access.html> (2023年12月30日最終閲覧日).
- 菅野淳夫(2008): 塩竈と共に生きる人々—祭礼を通じて見る地方中小都市の現状—。東北人類学論壇7: 62-79.
- 全国氏子青年協議会: 沿革・概要. http://www.ujisei.jp/index2_history_outline.html (2023年12月28日最終閲覧日).
- 松平 誠(1989): 都市生活文化論—都市祝祭の構成原理—。筑波大学博士論文.
- 三隅貴史(2020): 祭礼における共同性はいかにして可能か—東京圏の神輿渡御における町会—神輿会関係を事例として—。ソシオロジ64(3): 59-76.
- 茂木裕樹(2023): 氏子祭について(備考). 鹽竈神社博物館.
- 山田歩美・加藤雅大・有賀 隆(2020): 社会的紐帯としての神社祭礼の形式と運営の変容に関する研究—福井県吉田郡永平寺町柴神社を事例として—。都市計画論文集55(3): 1159-1164.